〈研究ノート〉

010；013.1
〈図書館；図書館員〉

文学に現れた図書館と図書館員（2）

滝沢　正順

The Library and Librarian in Literature (2), by Masanori Takizawa

4．文学作品のなかの図書館員

4－i．

図書館員については，欧米の小説に出てくる例をまずすこしみてから，日本のものへと移ることにする。

ストリンドベリの「痴人の告白」[161]のことはすでにふれたが，やはり前に出たボルヘスの「バベルの図書館」[162]は，図書館員が図書館についていろいろと述べる形でできている小説である。

また，フランスのもので，バルザックの「役人の生理学」では，「役所でほとんどお目にかからないにもかかわらずちゃんと俸給をもら」う「幻想的な存在」のひとつとして，司書について述べられている。[163]アナトール・フランスの「天使の反逆」[164]の図書館の司書の老人は職人気質風な印象がどこかあるようにも思われるが，同じアナトール・フランスの「学士院会員シルヴェストル・ボナールの罪」[165]の主人公の老人は，古文書学校を出た書誌学者で，図書館で記録集を見つけたことや写本の所蔵目録のことが出てきたり，旧家の所蔵する写本の整理をしたりしている。

アメリカでは，H. メルヴィルの「白鯨」の，本文の前の，いろいろな文献から集めた鯨についての文章集が，「ある司書補の，そのまた補の提供による」ものだとなっている[166]のは，知られたもののようだが，実際の作中人物ではたとえば，公共図書館に勤めるレイ・ブラッドベリの「何かが道をやってくる」[167]の老人がいる。ウィリアム・スタイロンの「ソフィーの選択」に出てくる男性は，製薬会社の図書館に勤めていることになっているし，[168]フィリップ・ロスの「さようならコロンバス」[169]の主人公の男性は，ニューアーク図書館に勤めている。

また，シンクレア・ルイスの「メイン・ストリート」[170]の主人公の女性は図書館学の教育を学校で受けた人物である。彼女は大学を卒業後，シカゴの学校で図書館学を1年間学び，それからセントポール図書館に3年間勤めている。結婚で図書館は辞めるが，夫と住んでいる中西部の町の図書館委員になったりする。

ブローティガンの「愛のゆくえ」[171]では，主人公3人のうち2人が図書館員である。ひとりはサンフランシスコの図書館にいて，もうひとりはカリフォルニアにある洞窟を使った保存書庫の担当である。もっとも，この図書館はかなり奇妙な図書館で，本を書いた人が，その自分の本を持ち込んで来るためにあるという図書館である。

欧米の文学作品には以上のように，図書館員の出てくるものがあるが，日本の文学作品にもいろいろと見つけることができる。日本のものはもう少し多くの実例をみていってみることにしよう。

4－ii．

図書館の業務のうちで，図書館員が利用者と直接ふれあうものに，本の貸出・出納や参考業務関係の仕事がある。そうした仕事を通して個人的に親しくなった利用者と図書館員が，男女としての愛情をもつ（もちあう）というのが，ひとつの類型として文学作品のなかに見ることができる。

たとえば牧逸馬の「暁の猟人」[172]では主要人物の一人の青年が帝国図書館に通っているが，帝国図書館の女性職員が彼に好意をもつ。この女性職員は次のように描写されている。

> 上野図書館につとめる女ライブレリアンの一人に，船橋奈津子といふ人がある。／かつて大学の女聴講生のひとりとして，珍しがられた人で，美しい歌で

1988年10月31日受理
たきざわ　まさのり　東京大学工学部機械系三学科図書室

も詠みさうな，すつきりした感じの女性。／図書館の女係員といふと，あまり似合はない洋装に踵の低い靴をはいて，いつの間にか婚期と教養を取りかへつこした人のやうに聞えるが，この奈津子は，その月並な概念から除外さるべき一人。／地味な，だが，趣味のいゝセルに，変り織のふくろ帯をきちんと結んで，おちょぼ口のほゝ笑みで鉄太郎を迎へた。[173]

有島武郎の「迷路」[174]はアメリカに留学した日本人の話で，フロラという大学図書館に勤める女性がでてくる。彼女は高名な大学教授の娘である。

M教授といへば米国でも有名なゴシック芸術研究の権威的学者だつた。……M教授の令嬢ともあるものが図書係をするといふのもアメリカに来て始めて見る意外だつた。[175]

M教授の大学とフロラの図書館の大学は，マサチューセッツ州にある同じ大学であり，彼女は，M教授の研究室で働いたり研究したりする主人公の日本人の青年に愛情をもつようになる。

「迷路」の発表は大正5～7年（1916～1918）で，作中の時代は日露戦争（1904～1905）当時である。すこし前に記したシンクレア・ルイスの「メイン・ストリート」（1920年発表）の女主人公は判事の娘だが，彼女がシカゴの学校で図書館学を学んだあとセントポール図書館に勤めていたのは，第1次世界大戦よりすこし前で，1910年の前後である。[176]道を題名にしたこの2つの小説は，発表も作中の時間もあまり離れていないが，(「迷路」の主人公の感じ方がもし作者自身とたいして変わらないものだとすると)，アメリカの図書館に関しては有島武郎よりシンクレア・ルイスの方が（自国ということもあって）詳しかったように思われる。

さて，大学教授の娘というと，前にもふれた三島由紀夫の「青の時代」[177]の若い女性もそうである。「青の時代」は第2次世界大戦後，金融会社をつくって失敗する東大法学部の学生の話で，彼の恋人(？)は，もと九州大学教授の娘であるとなっている。そして彼女は，前に書いたように東大図書館に徴用逃れに勤め，戦後もそのまま勤めている。主人公は彼女と，戦争が終了してすぐの図書館の屋上ではじめてあう。そして貸出係の彼女にあうため，主人公は図書館に通っている。

大学教授の娘が大学図書館に勤めているというのは，石川達三の「その愛は損か得か」[178]の主人公の女性の場合も同じである。もっともこの小説では，男女間や子供への愛情がいくつか出てくるが，主人公の勤める大学図書館の詳しい描写はなく，図書館の利用者も出てこない。（主人公が図書館で何の仕事をしているかもわからない）。

また，戸川幸夫の「オホーツク老人」[179]は，北海道知床半島の番屋（漁業小屋）の留守番の老人の話であるが，船が遭難して死んだ老人の息子と結婚の約束をした21～22才の女性は，網走の図書館の貸出係である。彼女のもとによく本を借りにきて親しくなったという設定になっている。

日下圭介の「黒い葬列」[180]の主人公は高校を出て図書館に勤めていた21才の女性である。彼女は母親が死んで弟と妹の世話をする必要があるため，図書館を辞めるが，彼女の勤めていた「古い紙の香が漂う図書館」に毎日通って閉館まで難しい本を調べていた医大生と親しくなり，結婚を申し込まれている。

津島佑子の「草の臥所」[181]の主人公も，小規模な映画会社のフィルム・ライブラリーに勤めていて，利用者であり，あとで同棲することになる大学生と督促のためにはじめて会ったというふうになっている。

ここまであげてきたのは，20才前後からせいぜい30才前の独身の女性図書館員と，利用者の男性の例ばかりであるが，図書館員と利用者の男女の関係が逆のものももちろんある。たとえば，清水邦夫の「戯曲冒険小説」[182]は市立図書館に勤める26～27才位の男性が出てくる戯曲である。この図書館員は，妻とは，彼女が利用者として市立図書館に来ていて親しくなったというふうになっている。

4－iii.

図書館員の出てくる日本の文学作品はほかにももちろんある。女性図書館員ですこしあげてみよう。

たとえば，瀬戸内寂聴（晴美）「罌粟」[183]の主人公は，大学の図書館に12年間勤めている。彼女は図書館に勤める一方，筆耕の仕事をしたり，他の大学の夜間部に通って卒業したりする。また彼女は12年間ずっと大学の教員の愛人であり，そのことがこの小説の中心的な内容になっている。図書館での仕事については，「学生に本の出し入れの世話をしたり本の整理をしたりする仕事で，楽だったが給料は安かった。」と書かれている。

津島佑子「光の領分」[184]の主人公は放送局のライブラリーに勤めている。仕事は放送に関する資料，使用済みのテープの整理，カードでの貸し出しである。高校の教員が教材用に詩の朗読のテープを借りに来るところが出てくる。この小説の主要な内容は，主人公が夫と別居してから正式に離婚するまでの生活である。

清水邦夫「あの輝ける日々」[185]（ラジオドラマ）に出てくる女性は夫と死別して一人暮しをしているが，公共図書館に勤めていて，夏は図書館が混雑して忙しいといっている。

同じ清水邦夫の「救いの猫ロリータはいま…」[186]は，町立図書館分館が全体の舞台になっている戯曲で，主人公は分館長の女性である。この分館には分館長のほかに山口君という男性の図書館員がいて，二人で分館を運営している。この戯曲で中心になる内容は，分館長の少女時代の駈落ち事件や「蒸発」した兄のことが原因であるらしい，彼女の不思議な言動である。

ここにあげたのは，利用者と親しくなるというパターンの図書館員たちより，年輩であったり，夫や家庭をもっている（いた）女性図書館員である。先の場合もそうなのだが，これらの作品では彼女たちについて，仕事よりも生活や個人的な事柄が作品のなかで大きなウェイトを占めている。つまりこれらの作品では図書館は，生活の手段や，職場という一般的なもののひとつとして扱われている。分館長という立場にいる清水邦夫「救いの猫ロリータはいま…」の主人公の場合も同様である。そしてこうした扱われ方は，文学に出てくる図書館員というものの，類型のひとつであるということができるだろうと思われる。

4－ｉｖ．

次に，図書館員一般の人間像といったものについて書かれているものをさがしてみよう。

中野重治の「司書の死」[187]は，語り手の「おれ」と高等学校・大学の同窓であったという，高木という司書のことを書いている。「おれ」によれば，高木は，彼が「出世しようとは，（「おれ」は）思ってみたこともなかった」「そのとおり，高木は出世しなかつた」という人物である。この高木司書は昭和20年代に図書館の仕事でアメリカに渡り，帰国途中の船の中で急病で死んでしまう。アメリカへ行く際には「低い給料のなかへ家族を置いて」いったとされている。

「司書の死」のなかには，ほぼ作者のものと思われる，「おれ」の，図書館についての回想もいくつか記されていて，また図書館員一般について，

> おとなしい人びと，反抗的でない人びと，破壊的でない人びと，善良で，どこかで人間の良さを信じてる人びと，しかし消極的なところのある人びと，こういう人びとが図書館にいるらしかつた。[188]

あるいはまた，

> 図書館人の，基本では人類を信用した，物欲のうすい，善良な，しかし性格的に消極的な[189]

という記述が書かれている。

清水邦夫の「戯曲冒険小説」は，前にも記したように，市立図書館に勤める男性が出てくる戯曲である。この男性は，婦人靴をうまく盗むことができない小心（？）な人物である。婦人靴を盗むのは妻の要請なのだが，婦人靴をうまく盗めないこの男のようなタイプは，作中の別の人物の言葉によれば公務員に多いといい，中学か小学校の教師ではないかと尋ねられる。しかし図書館に勤めていると答えると，図書館ならタイプが似ているからありうるといって納得される。[190]

例が2つの作品だけであるが，どちらの場合も図書館で働く人は，社会や人間について肯定的な方向に向いたものだという印象をもたれているとだけはいえるようである。そして同時に，マイナス的な面ももつものとして書かれている。

4－ｖ．

さて，こんどは，図書館の仕事にたいする位置づけや，作中人物と図書館（の仕事）との関係という点から作品をみてみよう。

図書館の仕事にたいする位置づけは必ずしも高くないという作品もある。記載はわずかだが，作中人物が図書館員の仕事をする村上春樹の「羊をめぐる冒険」[191]を引用してみよう。この小説の主要人物の一人である羊博士とよばれる人物は，大学の農学部を首席で卒業して，農林省に入省し，昭和前半の中国大陸で日本の戦争遂行に必要とされる緬羊の増産計画の作成にたずさわる。しかし，そうした活動ができなくなって，図書館員の仕事をするようになる。これは，左遷として記されている。原文は次のようである。

> 一九三六年二月，羊博士は本国に召還され，……その春には本省資料室に配属になった。資料の目録を作ったり，書棚の整理をしたりするような仕事である。要するに彼は東亜の農政の中枢から追放されたのだ。[192]

この場合かならずしも図書館の仕事である必要はなかったとも思われるが，図書館の仕事は羊博士にとってふさわしい仕事ではなかったようにこの作品では扱われている。（翌年には農林省をやめてしまう）。

外的な理由から図書館の仕事に携わったこの羊博士と

は逆に，図書館を自分から始める人物を主人公にした短い小説に，新田次郎の「こども図書館」[193]がある。

この新田次郎の「こども図書館」は，中野重治「司書の死」の引用にあった，善良とか人間の良さを信じるということがテーマである。

この「こども図書館」は，ある老学者（日本でも外国でも有名な学者で，愛郷心が強い人物であるとなっている）のもっていた子供に対する信頼が裏切られる話である。老博士は大学が停年になったら故郷に帰り，村の子供達の図書館を建てるという希望をもっていて，本を集めていた。そして老博士は村に帰る。（このときは第2次世界大戦前）。

> 博士と夫人が図書館の経営者であり管理人でもあつた。しかしこの図書館にはカードがなかつた。読んだ本はもとのところに収めて置けばよい。家へ持つていつて読みたい人は自分で備え付けのノートに記入すればよい。こういつたようにすべて子供まかせの図書館であつた。[194]

はじめのうちはこのやり方でうまくいっていたが，そのうちに本がなくなりだす。そして，村の子供が盗んだ本を隣り町の古本屋に売りにいったのが警察にみつかる。博士の図書館は6ヵ月目に閉鎖されてしまう。第2次大戦後まもなく博士は亡くなり，夫人も亡くなる。親戚・友人・村人が，十数年ぶりにこども図書館の扉を開くと，本はきちんと整理され，本を1冊1冊記録した整理カードもちゃんと準備されていた。それなのに博士は（夫人も）図書館を再開しようとはついにしなかったというのが，この「こども図書館」の内容である。

この小説は，設定などいろいろな点をだいぶ単純化した小説だが，博士（と夫人）は子供の人間性（の良さ）を信じたかったが，失望もきわめて大きかったのだというふうに書かれているわけである。

さて，曾野綾子の小説「堕落教師」[195]は，小学校の図書室に関する話で，図書館を自分から始めた「こども図書館」とは異なり，他からの依頼があって，その依頼に応えて図書館の仕事をする人物が出てくる。

「堕落教師」には，図書館教育のモデル校の指定を受けた小学校で，図書室整備と読書指導の新しい試みをする教員が出てくる。この教師は，校長に図書室整備を依頼されてから独学で日本十進分類法を勉強し，1万5千冊の本を整理するため毎日夜おそくまで残って仕事をしている。しかし，本の整理があらかた終わり，読書指導の最初の研究発表をした日の夜に急死してしまう。この教師と対比する形で　もう一人の別の教師が「堕落教師」には出ているが，こちらの教師は，本の読み方は本当に教えられるわけはないと思っていると作中でいっていて，校長から図書室整備の仕事を依頼されたときにも，断わってしまったのだと言っている。

また，欧米式の図書館が移入される以前の徳川時代の話の，山本周五郎「ひやめし物語」[196]は，書物の好きな部屋住みの若い武士が，藩の文庫の購書取調べとして出仕できることになるという内容である。

ここでみた作品のうち，「こども図書館」を除いた3作はどれも外的な理由から図書館の仕事に携わることになっている。しかし「ひやめし物語」では（生活上の理由もあるが）図書館の仕事は主人公にふさわしい歓迎すべきものであるのに対し，「羊をめぐる冒険」の場合はその逆である。また，「堕落教師」の急死する教師と「こども図書館」の老博士の場合は，どちらも本人たちの意図しない結果になってしまっている。図書館の仕事と作中人物との関係は，いろいろな場合があるわけである。

しかしそうしたいろいろな場合に，文学作品中の図書館員は，その図書館（の仕事）や図書館一般について，具体的にどのように感じたり考えたりしているのだろうか。ここでみた4つの作品のうち，「堕落教師」の急死する教師は他の作中人物の目を通した姿で書かれているので，図書館の仕事に意欲をもっているという以外には，そうした点はよくわからない。他の3作もその点は必ずしも明瞭ではない点がある。また前に図書館員一般の人間像という点でみた，中野重治「司書の死」と清水邦夫「戯曲冒険小説」の場合にも，図書館員自身のみた図書館員の人間像でなく，他の作中人物や語り手のみた図書館員の人間像だった。

そこで本稿の最後として，そうした点について書かれた部分のある作品を，次にいくつかみていってみることにしたいと思う。

4－vi.

正宗白鳥「波の上」[197]は，仲のこわれかけた空地（そらち）という若い夫婦と，夫の妹のおとく，仲人役をした夫の友人の征矢野の4人を中心とした小説であるが，この4人のなかの征矢野が図書館に勤めている。

征矢野は「僕の出てゐる図書館にも何万といふ書物があるが，あの中に何を書いてゐるんですかね。僕何ざそれよりも人間のしてゐることを見てゐる方が余程面白いですよ。」という意見を述べている。それに対して，あとで征矢野と駈落ちめいたことをするおとくに，そう思う

のは，役目柄書物を物品のように扱っているからで，たまには1冊でも身を入れて読んでごらんなさいと，冷やかすように言われている。

征矢野の図書館での仕事については，「機械的」で「単調」で「乾燥無味」なものであると書かれている。経済的な待遇も，「薄給で不自由してゐる」「貧しい征矢野」といった言葉が出てくるようなものである。征矢野は資産家の娘であるおとくと駈落ちめいたことをしたあと，一時の勢いで図書館を辞めてしまうが，作者は「長い間精勤してゐた彼れ」「僅かな俸給で若い盛りを幾年も過して来た彼れ」というふうに征矢野のことを書いており，征矢野にたいして決して批判的なわけではない。

「波の上」では，征矢野ののことはたんに「図書館の事務員」となっていて，彼の勤務時間に空地やおとくが電話をする以外には，図書館そのものも出てこない。また，征矢野の具体的な仕事の内容や，その仕事に対する彼の考え方も上に述べた以上に特に述べられているわけではない。

この点で，豊島与志雄の「溺るるもの」と阿部知二の「旅人」にはもう少しくわしい記述が見られる。

豊島与志雄「溺るるもの」[198]は，「或る図書館員の話」「或る売笑婦の話」「或る不良少年の話」という3つの部分から成っているが，語り手が3人なだけで，内容は1つの話である。この小説のなかの「或る図書館員」は，7年間図書館につとめていた。仕事は本の「表紙と目次とを調べて，カードを整理する」ことである。彼の勤める図書館のなかの空気は侘しいものであるとされている。彼の生活は次のようなものである。(点線は原文にあるもの)。

> 毎日午前九時から午後四時まで，月給百円……。そして家には，母と妻と娘，それから夕食後，生活のための翻訳の仕事……。せめて，多少の心酔か興味かを以て，その翻訳が出来たなら，或は多少の学術的研究心を以て，図書館の仕事が出来たなら……と私は幾度思ったか知れない。然し，下っ端の図書館員の仕事はいつも機械的であり，あてがわれるままを甘受する翻訳はいつも機械的であった。[199]

そして彼は先輩の好意で私立大学の英語教師になれることになる。図書館員をやめることが出来たときには「生まれ変ったように喜んだ」と書かれている。

阿部知二の「旅人」[200]にでてくる仁礼修造という図書館員の青年も，図書館の仕事になんの意味も希望も見出せないという点で「溺るるもの」の図書館員とよく似ている。

「旅人」の仁礼青年は，大学を卒業してから4年間，ある大学の図書館に勤めている。仕事は目録の作成である。彼は小説家志望で（図書館をやめたあとで小説家として売れ出す），大学を卒業するときもっていた文学によって生きようという志望は，現在している目録をつくる仕事より「もつと大きな，美しい望」であるという。彼が図書館に勤めているのは「安い給料で，この書庫のかげの室にこの仕事をするために使つて貰ふほかに，生きる途がなかつたから」である。彼に退屈していないかと訊ねるだけでも残酷なことであろうと作者は書いている。図書館員としての仁礼青年は，彼が友人に語る言葉によれば，「図書館つて，本を読んでゐればいいところぢやないよ。何年も，カタログばかり造つてゐてみたまへ。かへつて本が嫌になるばかりだ」というふうである。

「波の上」「溺るるもの」「旅人」の図書館員は3人とも平係員のようであるが，仕事が単調で機械的・事務的とされていることや，給与面での待遇が低いとされていることは，3作とも共通している。

野上弥生子「迷路」[201]の主人公（といっていいと思われる）菅野省三という青年も図書館員になるが，彼も「溺るるもの」や「旅人」とすこし形は異なるもののやはり本人の自発的な意志でなく図書館員になっている。しかしこの小説では前の2つの小説とは違って，主人公は図書館の仕事に意味と計画を見いだしている。今まで本稿では個々の作品について簡単にしかみてこなかったので，本稿であげる最後の作品である「迷路」については詳しくみてみることにしよう。参考のために「迷路」のなかの主人公に関する部分を年表にしておく。

「迷路」には昭和10年5月から昭和19年12月にいたる間の多様な社会層の登場人物がでてくる。菅野省三の年齢は作中に2度でてくるが，小説の最初の方では26才，終わり近くではあと2ヶ月で36才と書かれている。

菅野省三は，九州の由木という架空の町（作中のいくつかの記述からすると作者の出身地である大分県臼杵にだいたい相当するように思われる）の出身で，第一高等学校から東京帝大法学部に進んだという設定である。彼は大学在学中に，折から盛んであった左翼運動に加わるが，検挙され，いわゆる転向をして出所する。大学は2年で除名されてしまい，郷里に1年あまりいたのち，東京に出て，旧藩主である阿藤子爵家の史料編纂員と子爵の子供の家庭教師をする。しかし子爵夫人の誘惑にあったりしたので，政友会支持者の兄が選挙違反で検挙されたために帰省した際に子爵家を辞める。そして，由木の城跡の公園にある図書館に勤める。

由木の町出身の東京での成功者として，大物政治家の

垂水重太と財界人の増井礼三という2人の人物が「迷路」には出てくるが，由木の図書館はこのうちの増井礼三が，実質的な設立者であり運営資金の出資者である。この図書館は，作中に一度出ている開館式が11年前という年数から逆算すると，1925年（大正14）の開館である。この図書館は増井の「故郷への愛着の表示」[202]なのであるが，土地の人達にどう見られているかというと，

> 土地のものは，県庁所在地の釜田市にもない規模と建物を自慢しながら，それでも大阪商人式の通念でいう。―増井さんも気が利かん，図書館なんて年寄りの閑人か，書生っぽよりほかに入用のないものを拵えるより，同じ金で，なにか会社の一つもたててくれたら，町の潤いになるものを，と―。[203]

ほかにも「図書館なんぞより，もっと手っ取り早く町の繁栄に役だつことに金を投げだしてくれなかったのを残念がる人々」[204]とか，「彼らの表現によれば，図書館なんぞより，煙突の四五本もまず建てて貰いたかったのに」，[205]あるいは「町の連中は無用な飾り物を貰った気でいる図書館」[206]などと記されているように，自慢と不満の両方の意識をもたれているとされている。

この図書館は「小使を入れても十人ない館員」[207]によって運営されている。経費の点では「田舎の一般の図書館とは比較にならないほど潤沢に出ている」[208]とされている。（この小説では「田舎」という語には，後進的な土地という蔑称としての意味が一面にある。しかし由木の図書館の位置づけと関係しているので，原作の書き方を示す意味で，作中のまま引用することにしたいと思う。ご了解をお願いしたい。）そして菅野省三が図書館に勤める前，史料調査に通っているときの記述に，「閲覧者はつねはほとんどなく，町の小学校長を二十年近くもつとめた老館長を入れても，数人とはいない建物の中」[209]とあって，利用者の数は必ずしも多くはなさそうである。しかし蔵書については「すべてでまだ三万に達しない蔵書ながら，洋書の方は……田舎の図書館にしては粒が揃っていた」[210]と書かれている。

省三の図書館勤めは，始めは「腰かけ場所」[211]としてであった。戸主である兄に財産分与してもらうことを考え，それまでのつなぎとして省三の伯父の嘉助に提案された

野上弥生子「迷路」・菅野省三の年表

昭和8～9年（23～24才）
　左翼運動に関わる。
　検挙され，数カ月後，転向して出所。
　大学は2年で除名される。
昭和9年（25才）
　郷里に1年余りいる。
昭和10年（26才）
　4月　上京。阿藤子爵家の史料編纂員になる。
　5月　東京帝大五月祭（「迷路」の冒頭）
昭和11年（27才）
　2月　二・二六事件
　　兄が選挙違反で検挙，省三，帰郷。
　5月　郷里の図書館に通う。
　　阿藤子爵家の史料編纂員と家庭教師を辞める。
　7月　郷里の図書館に勤める。
　　兄，出所。
　　西教史史料蒐集のプランを増井礼三に話す。
　10月　増井が予算を出すことになる。
　　東洋文庫で文庫長の井村博士に会う。(西教史史料収集開始)。
　　以降，東洋文庫に通う。
昭和12年（28才）
　7月　蘆溝橋事件
　　天理(の)図書館に行く。
昭和13年（29才）
昭和14年（30才）
　8月　独ソ不可侵条約締結
　9月　欧州大戦はじまる。
昭和15年（31才）
　8月　史料集第1巻刊行
昭和16年（32才）
　9月　西教史史料収集を以後中止する。
　12月　太平洋戦争はじまる。
昭和17年（33才）
　　増井の姪の万里子と結婚し，郷里の図書館に再び勤める
　　（図書館の実質的な運営責任者になる)。
　　館長が図書館の資料購入で不満を省三にもらす。
昭和18年（34才）
　11月　召集令状が来る。
昭和19年（35才）
　2月　省三の部隊，小倉の兵営を出て輸送船で日本海を渡る。
　　貨車で中国大陸を移動し，河南に駐屯する。
　11月　省三，日本軍から脱走。

のである。もっとも，左翼運動で検挙された前歴から，勤められるかどうか心配して「田舎の城あとの図書館の事務員である自分を，自ら憐むことさえ早過ぎるかも知れない」[212]と考える。つまり勤める以前すでに必ずしも上質の勤務先とは思わなかったわけである。しかし，ともあれ彼は勤め（られ）ることになる。そして郷土の歴史に関係させて，キリスト教史というテーマを図書館のプランとして見出す。(図書館のある城跡の城はもと大友宗麟の居城だったとされている。)帰省した増井礼三に「田舎の図書館の仕事なんて，おもしろくないだろう。」[213]ときかれたとき，省三はこう言っている。

> 現在の彼には，おもしろい，おもしろくないで職業を択ぶ自由はもたない，と答えてから，自分でもつけ加えをした。「……僕は今の仕事に全然興味がないわけじゃありません。やり方によれば，随分おもしろい仕事になると思って大いに愉しいのです……」[214]

そして,「クリスト教の伝来と大友氏」に関する資料蒐集の計画と予算の援助を持ちだしている。さらに省三は，この計画によって彼の図書館での仕事は「僕にとっては一時の腰掛ではなくなったのですから，東京にも別に魅力を感じないのです。」[215]（兄に述べた言葉）というようになる。

省三は増井礼三に資金を出させることに成功する。そして史料蒐集のために東京に出て東洋文庫に通う。文庫長の井村博士のアドバイスも受け，東洋文庫に通い続けて，史料集の第1巻を刊行する。東洋文庫いがいにも，日中全面戦争の始まる蘆溝橋事件の前後には天理(の)図書館に調査に行っていたと書かれている。

ところで，そうした省三のことは周囲から必ずしも高く見られているわけではない。それを示すのが，増井の妻の松子の見方である。それは，

> 素姓も正しければ男振りもちょっとわるくないが，要するに赤の学生崩ずれの半端もので，会社にも銀行にも使えないから，増井が旧友（省三の伯父の嘉助）への義理だてに捨て扶持を与えるため，なにか古臭い仕事をさせているに過ぎない省三[216]

という見方である。

さて，キリスト教史の史料蒐集は史料集の第1巻が刊行されたあとは中止される。それは見込みよりも遥かに大変な仕事であると省三に理解されたためである。そして増井にも中止を了承され，ふたたび由木の図書館にもどることになる。由木では図書館勤め以外に，土地の歴史についてまとめてみようと考えている。もともと由木の図書館への省三の興味は，大友宗麟やキリスト教史への研究的な関心から出発していたが，まとめてみようと考えているのは，阿藤子爵家で書かれようとしている旧藩の藩史のようなものでなく，民衆の側からの土地の歴史である。

ところで今度の図書館勤めは，結婚して家庭をもってである。結婚したのは増井の姪の万里子とで，この結婚は省三を図書館の実質上の運営責任者にするが，また別の意味合いを図書館にもたせることになる。省三はもともと「郷里のことなどには全然関心がなかった」[217]という人物であるが，それはこの町が政友会派と民政党派との党派的対立による「下らない角突きあいと，儲けることしか知らない行き方」[218]をしている土地だからである。しかし省三の家は，兄も，亡くなった父も，この町の政友会派の頭であり，省三自身，行動や意識の上でその党派的なものから自由ではない。また，彼の意志とは無関係に彼の存在そのものが，党派性を図書館に帯びさせる。

> 増井礼三の建まえに準じて，図書館は中立の地位にあった。それを変化させたのは省三と万里子の結婚だといえる。またそれ以来館長の名こそゆずらないが，山崎老人がいっそ気楽な隠居役に廻って，省三にすべてを任せたかたちなのが，つねは目だたない色わけを，なにかの出来事でははっきりさせる。[219]

(増井礼三は「政友会の色はあるにしても，とにかく是々非々の態度を標榜している」[220]とされている。またこの時点には大政翼賛会が成立しており，政友会も民政党も解党して存在しないのであるが,「本質的には以前とかわりない土地の党派別」[221]があるとされている。)

戦時色はどんどん日本中に進行している。必ずしも戦時色と関係しているとは限らないが，昭和17年の由木の図書館の職員の状況はこんなである。

> 省三のほかの一二人を除いては，館員で六十以下のものはない。たいていは，山崎老館長がもとの教員仲間から拾いあげたものである。出征による移動はない代わり，……誰か知ら，なにかの老病に悩んでいてつぎつぎに休むが，それで極力はたのものには仕事をわたすまいとする。老後の生活のかすかな支えの椅子まで，いっしょに奪われないかを怖れるのである。蔵書や，閲覧者の数からすれば館員は多いのに，……事務の停滞があるのはそのためといえる。[222]

また山崎館長は資料の購入に関して省三に不満をもらすこともあるが，省三は出征して中国大陸へ行ってしまうため，図書館関係の主な事項はこれで終わってしまう。

図書館員としての菅野省三は，図書館の仕事に意味を

見出し，自分のプランによってその事業をおこなった(中途までだが）という点で，「波の上」「溺るるもの」「旅人」の図書館員たちとは全く異なっている。(もちろん批評はいろいろとできるだろうが。)もっとも，給与生活者である点では今まで出てきたほとんどの図書館員たちと同じであり，その報酬も，「迷路」のすぐ前にあげた3作の図書館員と同様に，やはり必ずしも十分とは限らないようである。省三は，結婚したばかりのとき，増井礼三のもとで経済的には不自由なく生活してきた妻の万里子が，図書館の俸給だけで家庭生活をやっていけるかどうか心配したりしている。(杞憂に終わるが。)

野上弥生子の「迷路」は，久板栄二郎が戯曲化しており，[223]（題はやはり「迷路」)，菅野省三と図書館関係のことがらは，簡略化されているが，だいたい原作と同じ形になっている。

「迷路」がたいへん長くなったが，文学作品のなかの図書館員が，図書館（の仕事）について，どのように感じたり考えたりしているかという点からみると，日本の文学作品の中にみられる図書館員のイメージは，一般には必ずしも高いとはいえないように思われる。もっとも，図書館そのもののイメージも必ずしも高くないためにそうなるのかもしれない。

本稿で今まで扱ってきた，図書館や図書館員の出てくる文学作品の数は決して多いというわけではない。しかしかりに日本だけにかぎってみても，明治以降の文学作品は，文学史的に意味のある作品を書いた作者や，広く読まれた作品を書いた作者の書いたものだけでも，相当の量にのぼるから，その中にはもっとさまざまな形態の図書館や図書館員があるのかもしれない。しかしそれらを見出すことは今後に待つ部分が多いように思われる。

注

161）『世界文学全集』第28巻所収　三井光彌訳　新潮社　昭和3年
162）ボルヘス「伝奇集」のなかの1篇。篠田一士訳　『世界の文学』第9巻所収　集英社　1978年
163）『役人の生理学』　鹿島茂訳　新評論　1987年　p.58－61
164）『アナトオル・フランス長篇小説全集』第15巻　川口篤訳　白水社　1951年
165）同上全集第1巻，伊吹武彦訳，1940年。『ノーベル賞文学全集』第4巻所収，伊吹訳，主婦の友社，昭和46年
166）『メルヴィル全集』第7巻　坂下昇訳　国書刊行会　昭和57年　p.13
167）『何かが道をやってくる』　大久保康雄訳　東京創元社（創元推理文庫）1964年
168）『ソフィーの選択』2　大浦暁生訳　新潮社　1983年　p.245
169）『20世紀の文学・世界文学全集』第19巻所収　佐伯彰一訳　集英社　昭和40年
170）『本町通り』　3冊　斎藤忠利訳　岩波書店（岩波文庫）1970－1973年
171）『愛のゆくえ』　青木日出夫訳　新潮社（新潮文庫）昭和50年
172）『暁の猟人』　新潮社　昭和10年
173）同上書　p.149－150
174）『有島武郎全集』第3巻所収　筑摩書房　昭和55年
175）同上書　p.250
176）『本町通り』で主人公が図書館に勤めるのは，小説の最初の部分である。
177）『三島由紀夫全集』第4巻所収　新潮社　昭和49年　図書館の部分はp.445－461
178）『その愛は損か得か』　新潮社　昭和57年
179）『戸川幸夫動物文学全集』第2巻所収　講談社　昭和51年　図書館のことはp.313
180）日下圭介『花の復讐』所収　講談社　昭和52年　図書館のことはp.12
181）津島佑子『草の臥所』所収　講談社　昭和52年　ライブラリーのことはp.40－41
182）清水邦夫『わが魂は輝く水なり』所収　講談社　1980年
183）瀬戸内晴美『花情』所収　文藝春秋　昭和55年　引用部分はp.74
184）『光の領分』　講談社　昭和54年
185）ラジオ放送の録音による。1985年12月放送，NHK・FM
186）清水邦夫『花のさかりに…』所収，株式会社テアトロ，1986年。または，『テアトロ』No.509，1985年7月，p.140－173
187）『中野重治全集』第3巻所収　筑摩書房　1977年
188）同上書　p.301
189）同上，p.305。p.299にも同内容の部分がある。
190）清水邦夫『わが魂は輝く水なり』　講談社　1980年　p.198－200
191）『羊をめぐる冒険』　講談社　1982年
192）同上書　p.248
193）『読書春秋』第7巻7号　昭和31年7月　p.26－27
194）同上　p.26
195）『曾野綾子作品選集』第7巻所収　桃源社　昭和50年
196）『山本周五郎全集』第20巻所収，新潮社，昭和58年
『山本周五郎小説全集』第24巻所収，新潮社，昭和44年
197）『正宗白鳥全集』第6巻所収　福武書店　1984年
198）『豊島与志雄著作集』第3巻所収　未来社　1966年
199）同上書　p.232
200）『阿部知二全集』第4巻所収　河出書房新社　1974年

201)　1984年改版の2冊本の岩波文庫のものによる。なお，岩波書店の『野上弥生子全集』では第9～11巻に収載（1981年）
202)　上　p.477
203)　上　p.386
204)　上　p.397
205)　上　p.408
206)　上　p.430
207)　下　p.214
208)　上　p.477
209)　上　p.370
210)　上　p.467
211)　上　p.386
212)　上　p.387
213)　上　p.412
214)　上　p.412
215)　上　p.442
216)　上　p.591
217)　上　p.405
218)　上　p.430
219)　下　p.214
220)　上　p.407
221)　下　p.214
222)　下　p.216－217
223)　『悲劇喜劇』　第28巻4号　1975年4月　p.81－138（ただし，上演台本）

〈参考文献〉

すこし長くなるが，本稿の最初に書いたように，参考文献をあげておく（5種類に分けることにする)。

1．複数の作品を紹介・列挙・論評したもの

竹林熊彦「明治初期の翻訳文学に見れたる図書館」
『図書館雑誌』Vol. 29 No. 10　昭和10年10月　p.375－380，383

高橋勝次郎「文学ニ現ハレタル圖」1，2
『圖研究』Vol. 9 No. 1，2　1936年　p.61－72，205－217

佐久間駿造「文学に現はれた図書館」
『図書館事業』第2巻1号　昭和12年5月 p.20－30

天野敬太郎「図書館を記す文芸作品」
同氏編『図書館総覧』文教書院　昭和26年　p.136

埜上衛「“文学作品・随筆にあらわれた図書館”一班」
『近畿大学短大論集』第9巻2号　1977年3月　p.161－179

馬場俊明「文学に現われた図書館」
『Lib. 京都産業大学図書館報』Vol. 6 No. 1　1979年4月　p.2－7

あきとし　じゅん『高橋和巳における狼疾』著者刊　1985年　p.164－179

中橋幸二郎「「阿部知二全集」・「高見順全集」にあらわれた図書館及び図書館員」
『東京大学図書館情報学セミナー研究集録』13　1979年後期　p.99－129

「新・図書館千夜一夜」1～6
『大学図書館問題研究会東京支部報』　No. 109～121　1985年12月～1987年6月

紫冨田忠和「文学に見る図書館風景」1～11
『みんなの図書館』　104～119号　1986年1月～1987年4月

滝沢正順「図書館文学事典」1～4
『東大大図研報』(大学図書館問題研究会東京大学班)　第78～82号　1987年3月～1988年5月

馬場俊明「フィクションのなかの「読書の自由」」
日本図書館協会・図書館の自由に関する調査委員会編『図書館は利用者の秘密を守る』(図書館と自由・第9集）日本図書館協会　1988年　p.57－76

紫冨田忠和「再び文学に見る図書館風景」1，2
『みんなの図書館』　136，138号　1988年9，11月

2．特定の図書館についてのもの

高橋和子「作家と図書館(1)－作品に描かれた図書館像－」
『相模国文』　第2号　昭和50年2月　p.29－40

「作家と図書館(1)」は帝国図書館（およびその前身）を対象に書かれているが，明治・大正期の同館での文学者の利用について，『上野図書館80年略史』(国立国会図書館支部上野図書館，昭和28年）はp.62－63に幸田露伴の回想を，『国立国会図書館30年史』(同館，昭和54年）は「序章・国立国会図書館前史」のp.22－27に幸田露伴の回想・田山花袋「東京の三十年」・樋口一葉の日記・菊池寛「出世」を，それぞれ一部引用している。

3．特定の文学者についてのもの（利用や作品）

熊原政男「図書館に於ける一葉の面影」
『図書館雑誌』Vol.24 No. 1　昭和5年1月 p.8－10

渋川驍「夏目漱石と帝国図書館」
『読書春秋』第6巻1号　昭和30年1月　p.34－37

茂川敏夫「近代文学を探る－『出世』から－」
『ひびや』Vol. 3 No. 9　昭和35年12月　p.4－6

山崎元「図書館と宮本百合子」
『赤旗』日曜版　1987年　3月29日

4．図書館関係以外の執筆者や文献が取り扱ったもの

槌田満文編『東京文学地名辞典』東京堂出版　昭和53年
上野図書館・大橋図書館などの項

『現代詩手帖』第24巻11号（1981年11月）の「特集・図書館幻想」のなかの次のもの
池内紀「書物人間」(p.47－53)

寺山修司「図書館の宇宙誌」(p. 54－59)
海野弘「バロックの図書館」(p. 60－65)
荒川洋治「図書館の人」(p. 84－86)
四方田犬彦「書物戦争論」(p. 92－98)
『現代思想』第13巻2号（1985年2月）の「特集・博物学のすすめ」のなかの次のもの
アリシア・ボリンスキー「反復，博物館，図書館」大熊栄訳　(p. 212－223)
ユージェニオ・ドナート「博物室の炉」　高山宏訳　(p. 230－251)
海野弘『書斎の文化史』　ＴＢＳブリタニカ　1987年
海野弘『部屋の宇宙誌』　ＴＢＳブリタニカ　1983年

5．図書館で働いた文学者に関連するもの

渋川驍「図書館に関係のあった作家」
『日本古書通信』　第28巻3号　昭和38年3月　p. 2－3
滝沢正順「文学者と図書館」1，2
『日本古書通信』第52巻9，10号　昭和62年9，10月
滝沢正順「図書館に勤めた文学者人名録」
『大学図書館問題研究会東京支部報』No. 117, 119 1986年12月，1987年3月
『東大大図研報』(大学図書館問題研究会東京大学班）第72～82号　1986年1月～1988年5月
渋川驍「プルーストとマザリーヌ図書館」
『図書館雑誌』Vol. 60 No. 7 1966年　p. 274－277
渋川驍「戸川秋骨と国立国会図書館」
「学鐙』第59巻4号　昭和37年4月　p. 37－39
以下はすべて渋川驍氏の執筆で『読書春秋』に掲載
「アナトール・フランスと仏蘭西上院図書館」
第2巻9号　昭和26年9月　p. 7－9
「ストリンドベリーと瑞典王立図書館」
第2巻12号　昭和26年12月　p. 32－35
「ゲエテとワイマール図書館」
第3巻4号　昭和27年4月　p. 32－35
「レッシングとヴォルヘンビュッテル図書館」
第3巻11号　昭和27年11月　p. 28－30
「スタンダールと巴里国民図書館」
第4巻3号　昭和28年3月　p. 28－31
「アーヴィングとニュー・ヨーク公共図書館」
第4巻8号　昭和28年8月　p. 12－15
「プロスペル・メリメと大英博物館長パニッチイ」
第5巻1号　昭和29年1月　p. 34－37
「森鷗外と図書寮」
第6巻10号　昭和30年10月　p. 12－15
「チェーホフとタガンログ市立図書館」
第7巻3号　昭和31年3月　p. 28－31
「カーライルとロンドン図書館」
第8巻8号　昭和32年8月　p. 6－9，11

参考文献については，飯澤文夫氏と大浪美雪氏にご教示いただいたものが含まれている。特に渋川驍氏の書かれたものはほぼ全面的に飯澤氏に教えていただいて知った。上記文献中の中橋幸二郎氏のもので中橋氏があげられた参考文献にも大変教えられた。またその他の方のものに参考文献としてあげられていて知ったものも含まれている。以上，付記してお礼申し上げます。